

近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜

——昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし——

久保田裕子

1. 南へ、南へ—〈南洋〉としてのタイ表象の系譜

「南へ南へ、この言葉は近頃我が国に於ける合言葉の一つになつてゐて、その意味は多くの解説を加へないでも人々の心から心へ伝つていく。」台湾南方協会編『南洋読本』（三省堂、1941・11）にはこのようなスローガンが掲げられ、次のような宣言が続く。

「アジアはアジア人の手に」といふ叫声は怒濤の如く澎湃として押寄せてゐる。たまゝ第二次欧洲戦争によつて、南洋に於ける欧米の勢力は動揺を来してゐる。アジアの盟主日本が三百年前の祖先の雄志を継いで、再び奮ひ起つべき秋は来たのである。しかしわれらの志は白人の如き領土的野心に出づるものではない。又単なる物資の獲得や貿易の独占にあるのでもない。一に大東亜共栄圏を確立して、アジア人の共存共栄を図り、アジア民族解放の実を挙げんがためである。

昭和10年代に「アジア」として一元化されている地政学的領域には〈南洋〉地域も包摂されていた。1887（明治20）年に志賀重昂は、「南洋トハ何ゾヤ。未ダ世人ガ毫モ注意ヲ措カザル箇処ナリ」¹⁾と述べ、西欧とも日本とも異なるもう一つの地域としての〈南洋〉を措定してみせた。その後服部徹『南洋策—一名南洋貿易及植民』（村岡源馬、1891・10）、鈴木經勲『南洋探検実記』（博文館、1892・7）などの南進論を説く出版が続いた。「南洋群島」はミクロネシアに散在する北マリアナ、カロリン、マーシャルの各諸島からなる旧日本信託統治領の総称であるが、〈南洋〉と呼ばれている地域は、昭和10年代にはさらに「蘭領印度、英領マレー、仏領印度支那、米領フィリッピン、豪洲領ニューギニア、それに独立国のタイ（シヤム）を加へて、我等はこれを南洋と総称」²⁾していた。冒頭のスローガンはアジア主義と南進論を接合させ、帝国主義的膨張を目指した昭和10年代の政治的言説を反映しているが、明治後期から昭和戦前・戦中期にかけて、〈南洋〉は地政学的実体であっただけでなく、遠く離れた日本においてさまざまなイメージ表象の源泉となった。どことも知れない場所への憧憬を仮託された幻想としての〈南洋〉。

黒潮寄せ来る大うな原も、
わたれば近し、シヤムの国。
南へ、南へ、船行く、船行く。
山田長政 日本男子。

1942（昭和17）年を使用開始年度とする『初等科音楽二』（文部省，大日本図書株式会社，1943・8）に載せられた小学校唱歌「山田長政」の「南へ，南へ」の呼び声は，虚構のイメージを通して子供の心にも響いたことだろう。また「大正期を代表する南洋紀行」³⁾として評価される鶴見祐輔の『南洋遊記』（大日本雄弁会，1917・3）は，「賜 天皇陛下乙夜之覽」と冒頭に掲げられ，日本人の海外雄飛を勧め〈南洋〉各国の歴史・風俗を紹介している。同時に本書では，「少年の夢」と「帝国主義」とが，「憧憬」を介して結び合うさまが高い調子で宣言されている。

南国に対する興味と憧憬とを刺戟するの無ければ，我々が意を安んじて，墳墓の地と為す丈の心構へは起つて来まいと思ふのである。（略）帝国主義は揺籃の中にある，少年の夢に通ふ，異郷外域の風光は，之れ馳，日本民族膨張の礎石と為るのである。（『南洋遊記』）

南洋への憧れは，明治・大正期の南進論を経て昭和10年代には更に具体的に政治的な文脈を帯びようになる。そして「興味と憧憬」は昭和の少年たちにも引き継がれた。南洋一郎の『緑の無人島』（大日本雄弁会講談社，1938・3）では，少年読者に向けて，帝国主義的欲望も露わに呼びかけている。「南へ南へとこのびつつある日本帝国の若き愛国者である諸君よ。目を南洋の地図の上におきたまえ。そこに諸君がやがて，大活動をなすべき舞台がある。」昭和10年代の「少年倶楽部」などを舞台に〈南洋〉を舞台とした冒険小説が発表されたが，これらの奇想天外な「少年の夢」は，未知の領域であるからこそ，いくらでも想像の範囲を広げることができた。一方で，これらの荒唐無稽な夢には政治的・社会的文脈における明確な根拠があった。「南へ，南へ」という呼びかけに胸を躍らせた少年の一人であった三島由紀夫は，1965年，67年にタイを訪れているが，その際に「帽子の前後がわからず，『少年倶楽部名作選』をひもとして，『吼える密林』の挿絵の故実に従つて，前後をはつきりさせた」⁴⁾と述懐し，少年時代の熱烈な読書遍歴について語っている。このように明治期から昭和戦前期にかけて，時事的評論から教科書，少年読み物に至るまで，さまざまなテキストが〈南洋〉への夢を誘っていた。

近年の日本文学研究の領域においても，昭和10年代において，〈南方〉〈南洋〉地域がいかに表象されてきたかという問題系が提示され，さまざまな角度からの照準を当てた成果が報告されている⁵⁾。これらの表象された中国・韓国・台湾及びインドネシア・ジャワといった「南方」の諸相は，主に1940年代までの日本の旧植民地地域における文学者の戦争体験を基盤としている。日本とタイとの関係性については，1941年に日タイ攻守同盟が締結され，同盟国として政治的には他の植民地化した〈南洋〉諸国とは異なる国際関係があった。戦時下にタイに渡航した日本文学者が少なく，また日本語教育が普及せず，タイ人による日本語文学の可能性も考えにくいという事情があり，日本文学の問題としては従来あまり論じられてこなかった。

統計的に見ても，タイは日本が植民地化した国々とは異なり，「二〇世紀初めの東南アジア居住日本人数」を参照しても，例えば1929年に15487人であったフィリピンなどに比べ，259人と桁違いに少なかった⁶⁾。また『泰国統計書』（五十嵐隆代表，国際日本協会，1942・12）によれば，「国籍別性別外国人バンコク到着者数」は1938～1939年で日本人男子375人，女子62人に過ぎず，諸外国に比べても日本人の占める割合は僅少であった。しかし先に挙げたように，昭和10年代当時であつては〈南洋〉という地政学的範疇の中にタイも包摂されていた。〈南洋〉

という虚構の楽園が、政治的・地政学的実体と分かちがたく結びついているとすれば、一括りにされがちな〈南洋〉をめぐる荒唐無稽な夢も、日本との関係性の中で、国家によって個別のイメージが紡がれていった可能性がある。

神谷忠孝は「南進文学」を定義し、徴用作家たちの研究推進と同時に、「もっと巨視的に、日本にとって東南アジアとは何か、逆に、東南アジアにとって日本とは何かという観点も必要になってくる。」⁷⁾と指摘しているが、この視点の重要性は、東南アジア研究が拡大・発展しつつある現在にあって重く響く。同時代言説の交錯する地点でさまざまな言説の集積が、タイをめぐるどのように形象化され、表象されていったのか。その問題について考えるためには、〈文学〉テキストの枠組みをいったん解体し、同時代のさまざまな言説の中から表象イメージを析出して再構築し、分析する必要がある。本論においては、〈南洋〉に包含されていた昭和10年代までのタイのイメージ表象と、戦後の高度経済成長を迎えた1960年代以後の日本文学におけるタイの土地と人々をめぐるイメージ表象がいかに変容しつつ再生産されていったか、その断絶と継承の問題について考察するための端緒としたい。

2. 山田長政をめぐる二つの時代—日清戦争前後と昭和10年代

明治期から続く南進論、南洋論的言説についてここで詳述する余裕はないが、タイについて日本国内で刊行された書籍は1893年の暹羅事件直後でタイへの関心が高まった日清戦争前後と昭和10年代に集中していることがわかる。双方とも海外への膨張政策が喧伝された時期であった。例えば稲垣満次郎は、1895（明治28）11月に「暹羅ノ危急ナルハ朝鮮ヨリモ太甚タシ」という日タイ関係の重要性を主張した主張を『東邦協会会報』第16号に掲載し、1897（明治30）年に初代駐タイ国公使に任命された⁸⁾。また後に『暹羅老搦安南三国探検実記』⁹⁾を刊行することになる岩本千綱が日清戦争開戦の前年に東邦協会で行った講演「暹羅談」（『東邦協会報告』第25号、1893・2）は、「貿易上の競争に於て暹羅王国三十余満方哩の山川は英仏両国が将来商戦の勝敗、覇権を争ふ決戦の一大要地たるは、万々疑を容れざる也」という報告があり、英仏の帝国主義的覇権争いの緩衝地帯としてのタイの実状が伝えられていた。

そして日清戦争前後から、日タイ関係はしばしば山田長政との関連で論じられるようになっていく。遅塚金太郎（麗水）『少年読本第七編山田長政』（博文館、1899・4）は、「自序」において、「其の気魂西洋南溟を呑み国運の旺盛なること」を「我が海国の少年諸子」に向けて宣言している。

明治二十八年、我大いに清国に克ち、二億余万元の償金を獲、更に台湾澎湖を割譲せしめたり、史ありし以来、外国と戦ひて斯る大勝を得たるは、未だ曾てあらざるところ、是に於て我国は躍然として世界の列強を排して其の間に相伍し、東洋に雄視するに至りたり（略）。（『少年読本第七編山田長政』）

山田長政をめぐる伝説が再生産されるに至ったのは、日清戦争において初めて国際的戦争に参戦し、それが「世界」という外部からのまなざしを意識する経験であったことを示唆している。

そのときに自ら理想化した自分自身を映す鏡として、「東洋、南蛮、到るところに雄張」したイメージが長政に仮託された。ここでの〈日本〉は、「西洋」と対立しつつも「東洋」を侵略するという、どの圏域にもカテゴリー化されない曖昧な存在である。したがって未だ曖昧な〈日本〉のイメージを実体化するために長政という伝説的人物が召喚されたと考えられるが、「暹羅」の国や人に関する描写は殆ど見られない。

ここで現実の政治政策的動向に目を向けると、日露戦争後に寄稿された稲垣満次郎の「暹羅国の現状」(『東邦協会会報』第132号、1906)には、「従来特に日露戦争後には暹羅国は日本を東洋に於ける兄国と欣慕し」、「東洋の一独立国」を助けることは「日本が東洋に於ける先進国たる天職」であると綴られている。一外交官の言葉であるが、戦勝国としての高ぶった自信と共に、日タイ関係を兄弟関係のメタファーでとらえている点が注目される。二国間を血縁関係のメタファーで語りつつ、そこに兄-弟の序列を設ける見方は、日本側の言説としてその後もしばしば登場する。大正期にも「東南亜細亜に国をなすもの、豈に単り暹羅のみといはんや、而かも山田長政の故事によりて夙に吾人の間に名を知られ、以て今日に至れるもの、暹羅の右に出づるものなし」¹⁰⁾と長政に関する記述が見られるが、昭和10年代に至り、再び多くの山田長政物語が登場する。

佐藤春夫の「山田長政の一生一図南の鵬」¹¹⁾では、「暹羅」をめぐって西欧と日本とが対立しているが、「今日も王と長政とは王の居室で南蛮人どもの侵略の狡猾手段を論じ合つてゐた」親密な仲であり、王と長政は「君臣の義」で結ばれ、「父子の情」を共有する信頼関係が描かれている。しかし長政は「手勢を日本風の行列に整へ、自身は緋緘の鎧に鉄形の兜」という出で立ちで武士の習慣と精神を追慕し故国を忘れることはない。タイ王女との間に生まれた息子には故郷の「習ひと教と風土」を教え「日本の武士のやうに」育てている。長政の「敵としてはおそるべく身方としてはこの上なく頼もし」い敏腕で忠義を尽くす姿は、理想化された〈日本〉のイメージであると言えよう。言い換えれば「暹羅」を舞台にしながらも、ここでは理想化され、失われた〈日本〉が立ち上がってくる仕組みになっている。この頃、『少年倭寇と山田長政』(芦間圭、大同館書店、1934・9)、『日泰関係と山田長政』(中田千畝、日本外政協会、1943・3)など山田長政関連の類書が夥しく刊行された¹²⁾。

しかしタイを含めた〈南洋〉をめぐって、あまりにも実状から遊離したイメージが先行している状況について、昭和10年代当時であっても危惧する声が挙がっていた。井東憲の『南洋の民族と文化』¹³⁾では、「(南洋とは-引用者注)人に依つて勝手な解釈をしてゐるもので、奇怪にもその指示するところが一致してゐない」ことが多く、「政治的に見たり、産業上から見たり、軍事的に見たり」論じる側によって多様な解釈が施されているさまを指摘している。山田長政伝説関連の小説テキストも、殆どが現地を訪れずに書いたという制約もあり、対象の思いがけない姿を知り、驚きと共に描くというよりは、見る側(書き手側)の欲望を他者の姿に反映させるものとなっている。タイを舞台に描くことを通して、合わせ鏡のように虚構化された自己の姿が浮かび上がってくる。

さらに明治期から続く南進論の系譜の中で、昭和期について「満州事変以来の大東亜の建設は臨機応変の連続なるが故に、そこには初めから一定の計画といふものがなかつた」¹⁴⁾という評価が、既に昭和10年代当時から下される例もあった。明治40年代から南洋と関わりのあつ

た岡野繁蔵は1942（昭和17）年に、「我国に於て、南洋の事情が新聞、雑誌、その他の刊行物によつて、盛んに紹介されるやうになつたのは、つい近年大東亜共栄圏といふ言葉が、喧しく論議されはじめてからのこと」¹⁵⁾と証言している。このように明治以来の南進論的言説は、昭和10年代に「大東亜共栄圏」として再び隆盛を見せるが、想像力に基づいた「南へ」のかけ声もたらす付け焼き刃的なあやうさも指摘されていた。

3. 三井暹羅室とミス・タイ

日本国内でタイに関する刊行物が増えるもう一つのピークとなる昭和16～17年頃は、「東亜新秩序」概念を一層拡大して、同盟国・タイ王国をも含めた、東南アジア共同体戦略構想が構築された時期であった。太平洋戦争開戦直後の1941年12月には日タイ攻守同盟が締結され、それを受けて日本タイ協会編の『タイ国通史』（興亜日本社、1942・5）「序文」では、「共栄圏内の諸民族と相提携して『アジア人のアジア』建設に邁進しなければならない。」と宣言されている。欧米の植民地体制を打破した後、日本を盟主とする新たな植民地を再編するという国家的目標が明言され、タイも「アジア」の一員として、「大東亜共栄圏」構想に組み込まれている。さらに国内や在タイ日本人の間では、西欧に対峙する「亜細亜」の独立国として両国の共通点を強調しながらも、「大東亜共栄圏の指導者」たる日本との序列を明確化するという構図が見られる¹⁶⁾。

当時の議論においては両国の異質性よりも、日本との共通性、及び両国の皇室・王室の友誼的關係を強調する傾向が見られた。この点について、矢野暢は「明治から昭和十年代後半にかけて、日本人の意識構造を特徴づけたのは、南洋と日本との異質性をきわだたせる考え方よりは、むしろ同一性＝画一性の論理で両者を結びつける傾向の発想であった」¹⁷⁾と指摘している。例えば1868年に即位した明治天皇とラーマ5世とを西欧に対抗しつつ国内改革を推進した近代化の旗手として結びつけるという見解は、戦後の1960年代以後も日本において流布し続けた堅固なイメージであった。ラーマ5世によって開始されたチャクリ改革を明治維新と対比し、国内統一と改革を断行しヨーロッパ列強と対峙したラーマ5世のタイ近代化開始者としての役割と成果を指摘するだけでなく、王自身が「並々ならぬ日本への関心を示していた。」¹⁸⁾と指摘することで、そこに日本の影響を仄めかす論が見られた。日本側において、日本とタイの近代化を重ね合わせる見方があったにせよ、その後の日タイ関係の経緯を参照すれば、タイ側から見れば両国の関係は失望に終わったと推察される。例えば1898年2月に調印された日本暹羅修好通商航海条約は、日本が領事裁判権を要求したもので、「シヤム側からすれば、ラーマ五世（チュラーロンコーン王）下でのチャクリ改革を通じ対英ボーリング条約をはじめとする欧米列強との間の不平等条約の改正に全力をつくしていた中で、近代化の一モデルともみていた日本からさらなる不平等条約を強要されたことはきわめて屈辱的」¹⁹⁾であった。結果として「日本に対する、そして汎アジア連合をめざす日本の使命に対するタイの熱狂は著しく氣勢をそがれ」²⁰⁾る結果となった。また実際にはチャクリ朝のタイ王室は「ヒンドゥー的・仏教的王権観念」²¹⁾を包含していて、日本の天皇制とタイ王制を安易に比較することはできないという指摘もあるが、当時の議論の中ではその異質性より日本の皇室との友好関係を強調する傾向が見られた。

しかしその後タイ側のまなごしに気付き、受け止めるような記述は少ない。このような見方は1960年代以降にも根強く継承され、日タイ関係のイメージの起源が昭和10年代の認識を引き継いでいることを示唆している。

タイは同盟国という政治的に対等な関係性を保持していたために、そこに形成された他者の排除と包摂を伴う言説はより複雑な様相を呈していた。同一性を装いつつも階層的序列を内包している点で、日本側によって構築された日タイ関係のイメージは、「大東亜共栄圏」という虚構によって包摂され、地政学的・歴史的差異を無効化する視点によって統合されていた。言うまでもなくこのような両国の関係性をめぐる言説が構築された背後には、帝国主義的の欲望やあからさまな経済的利害関係が見え隠れする。

このような状況の中、財閥系総合商社三井物産は昭和10年代のタイにおいては圧倒的なシェアを独占し、三菱商事（昭和10年11月）、横浜正金銀行（昭和11年7月）等に先だって昭和2年1月に出張所を設置（『挑戦と創造—三井物産100年のあゆみ』日本経営史研究所、三井物産株式会社発行、1976・7）し、「三井物産の独壇場であつた盤谷」（『暹羅案内』三井暹羅室編、十字屋書店、1938・11）と自ら恃む通り、南方進出の拠点となっていた。『暹羅案内』には「日本のためにも多種多量の工業原料の供給者となり得る（略）日本商品に対して更に重要な市場を提供する（略）東南アジアの一角に於てアジア防衛の前線として、強力な日本の盟友国」といった記述が見られるが、一方で「盟友国」に向けて原料供給地でありかつ商品市場であると見なす帝国主義的の欲望を露骨に表し、「要するにシャムは何れの点より見ても日本の弟であり得る」と結んでいる。両国の共通性・同質性を強調しながら、同時に明確な序列を設けることで、経済的収奪の正当化を行う手法は、先に挙げた例とも共通している。いずれにしてもタイへの勢力圏拡大に際して暹羅室を擁した三井物産の果たした役割は大きかった。

山口武は両国の通商関係について、タイ国内で発表された「在暹羅日本公使館開設以後現在迄の日暹関係を概述して」（『財団法人暹羅協会々報（日暹修好五十周年記念特輯号）』第9号、1937・12）において、「今日の盤谷三井物産支店は外国商社と互して押しも押されもしない日本代表商であるが、之は矢張り商船二十有余年奮闘の結果」と手放しで称賛している。この「会報」が発行されたのと同じ1937年の『バンコック・タイムス』に掲載された「東南亜細亜の支配権を確立するに當り暹羅が戦略上如何に重要な存在であるかその価値を今日程認められたる事は未だ嘗てなかつたのである。」²²⁾ という覇権主義も露わな記事は、かつて少年たちに「南へ、南へ」と呼びかけた声の行先を示している。

坂本雅子の『財閥と帝国主義—三井物産と中国—』（ミネルヴァ書房、2003・7）は、日本のアジアへの進出・侵略が、財閥企業の活動と連動しつつ発展した経緯について論じているが、「序論」において、主に中国に関する分析であるが、「日本の対外進出を、その開始から担った唯一の財閥が三井財閥であり、その中核が三井物産」²³⁾ であつたと指摘し、財閥が日本の対外政策に与えた影響、資本輸出と帝国主義的進出の関連について言及している。企業と戦争との関連性は密接であり、特定の財閥が「南方経営についても、占領前から調査に当り、軍部・官僚に情報を提供し、戦争勃発後は、資源開発や物資獲得の具体的占領開発計画を提出」²⁴⁾ するなど、南方の事業と公益でも中心的な役割を担った点を指摘している。タイにおける状況も、軍部・官僚主導型の対外進出と経営とは異質な、民間企業によるソフトな覇権主義の影響力が大きかっ

たことがうかがえる。

例えば三井暹羅室（後に三井タイ室）は1935年に三井合名の常務理事であった池田成彬の発意により開設され、「タイの調査、日本人およびタイ人の渡航のあっせん、タイに関する書籍の出版の他、在日タイ人留学生に対する旅行のあっせん、宿舍の紹介、世話なども行った」²⁵⁾という。日本とタイを往還する人々を援助し、あるいは『暹羅案内』などの書籍を刊行してタイの歴史・社会・文化について啓蒙し、名所旧跡などの観光案内を掲載して旅行者の実用に供し、日本国内に向けては情報を提供することで未知の土地への憧れをかき立てた。『暹羅案内』には多くの図版が掲載されているが、その中でも「パヌンをつけたミス・シャム」「キモノを着た暹羅娘」など女性にかかわる写真や記述が多く見られる。民族的なイメージを強調する一方で、日本へと同化させようとする意図がうかがえる。経済活動だけではなく、生活のさまざまな場面において日タイの友好関係を推進することを通して影響力を発揮したさまがうかがえる。このようなアジア太平洋戦争下の財閥商社三井物産の経営活動について、今日の視点からの評価としては、次のような指摘がある。

日本の全貿易額の二割以上を占める圧倒的存在の総合商社であり、戦時経済を円滑に運行するためには、政府は三井物産などの大商社の蓄積されたノウハウを積極的に利用せざるを得なかった。三井物産、三菱商事などの財閥系総合商社の積極的利用なしには、そもそも「大東亜共栄圏」全体の効率的物流は不可能だったと言ってよい。とりわけ、日本から遠方に行くほど、三井物産など大商社への依存度は高かった²⁶⁾。

『挑戦と創造—三井物産100年のあゆみ』（日本経営史研究所編、三井物産株式会社発行、1976・7）には、軍部の指令により「大東亜共栄圏」構想のため、「三井物産はアジア各地に事業を興さざるを得なかった」という記述がある。つまり財閥系総合商社が戦時下に果たした役割の重要性は、軍部の圧倒的影響力から距離を置いた〈南洋〉地域において、相対的に大きかったということになる。支配や覇権の形態は、巧妙で洗練された手法が用いられ、そこでは人的交流の他、情報伝達を通じたイメージ化による他者の取り込みが行われた。言語や映像イメージを通じた支配が効力を発揮したと考えられる。先に述べたように、しばしば日タイの関係性について、日本側からは血縁のメタファーで語られたが、その他にもタイのイメージを女性ジェンダー化して再編するまなざしを見出すことができる。言い換えれば権力関係に基づく序列を年齢差だけでなくしばしば男女間のアナロジーとして固定化し、日本を男性、タイを女性と見なし、劣位の立場の者を保護するというイメージが作られた。例えば先に挙げた『タイ国概観』の冒頭には、「一九四〇年のミス・タイ」の写真が掲げられている。そして「ミス・タイ」の日本訪問を実現させた主催者は三井物産であった。「ミス・タイ」の日本招聘に関して、三井ラインの船舶が使用されたが、当時の新聞記事は、「三井船舶部より恒例によつて」（『朝日新聞朝刊』1941年4月12日）招待していた経緯を伝え、三井物産主催の事業として来日した「ミス・タイ」が「艶麗振袖姿」（『読売新聞朝刊』1937年4月24日）を見せる写真が掲載されている。さらに「日泰和親友好条約」が締結された直後の「読売新聞朝刊」の1940年6月30日の記事には、「ミス・タイ」とワット・アルン（暁の寺）の写真が添えられている。民族的なステレオタイプを

強調する際に、女性表象が引用されている。これも選ぶ側の男性＝日本、選ばれる女性＝タイという関係を視覚化し、それを日本国内に目に見える形で紹介するという機能を果たした。いわばジェンダー・ポリティクスと帝国主義的の欲望が結びついた一例と言えよう。

このようにタイに向けられたエキゾティズムに満ちたまなごしは、帝国主義的な領土拡張の欲望と密接に関わっていた。直接植民地化した東アジア地域とは異なり、同盟国であったタイは、日本にとって直接的・実質的な統治制度が構築されず、皇民化政策への練り込みが希薄であった。一方で相手を自分の側に包摂し、同一視するという、いわば言語をめぐる支配というかたちが濃厚に見られた。そこには親密さを装いつつ相手を従属的に見るまなごしが注がれたが、その一方的かつ曖昧な関係性が、タイに向けられたイメージ構築の虚構性を露わにしている。

4. 財閥系総合商社「五井物産」と三島由紀夫『暁の寺』

昭和10年代に見られた国家をめぐるジェンダー化言説の構築と流通は、文学テキストとも関連性を見出せるが、特に1960年代以降の日本文学において、タイという場所をエロ的な魅惑に満ちた、女性のジェンダーやセクシュアリティと結びつけて表象するテキストの系譜へとつながっていく。この点についてはナムティップ・メータセートが詳述している²⁷⁾。

1960年代の日タイ関係について、「戦後の復興と賠償交渉・特別円問題などの戦後処理をすませ、先進国仲間入りしたという自信を背景に、日本が東南アジアでの政治的影響力を及ぼそうとしたのが一九六〇年代²⁸⁾」になってからであり、その後の「日本企業の本格的進出」と「その進出のあまりのすさまじさ²⁹⁾」を示す状況下で、激しい反日運動が展開された。その背景には、対日貿易においてタイ側の入超現象の不均衡が著しく、「対日輸入額が同輸出額の2倍強といった異常な不均衡が恒常化³⁰⁾」するという事態が背景にあった。このような経済活動の不均衡の一方で、観光地としてのタイが脚光が浴びるようになった。経済発展がもたらした競争社会に違和感を覚えた若者たちにとって、タイはにわかに魅力を持った存在として、放浪の旅の行き先として選ばれた。

それらのテキストについて考察する前に、昭和10年代と戦後のタイを表象した日本文学の問題について考察する前提として、二つの時代を射程に入れた三島由紀夫『暁の寺』（『新潮』1968・9～70・4）について、物語のアウトラインに沿って言及しておきたい。

本多繁邦にとってタイは「見物」し観光する対象であり、審美的に消費する旅行者としてのまなごしが展開していく。その点で戦前を舞台にしながらも、1960年代の日タイ関係が織りなす新たなイメージが反映されている。そして彼をタイへ呼び寄せ、飯沼勲からジャントラパー姫への転生の確信を抱く契機を作ったのは五井物産であった。また本多が松枝清顕、飯沼勲の転生の確信を得たインドのベナレスへの旅は、最初から企図されたものではなく、「五井物産の各地の支店が最上の御世話をするという約束」に保証された「大名旅行」であった。五井物産の権勢と経済力に支えられた観光は、本多にとって「極東日本がかつて西洋から甘受したオリエンタリズムのまなごしを、再び『大東亜共栄圏』内の『近代化に遅れた』周縁に向けて投影していく過程³¹⁾」でもあった。

本多の転生への覚醒や唯識論への傾斜を促す上でテキストの背後に時折その存在を垣間見せ

るのは、アジア各地に網の目のように張り巡らされた支配網を持つ、資本主義の象徴である財閥系総合商社であったことの意味をあらためて考えてみたい。会社は本多にオリエンタル・ホテルの贅沢な一室を「与へ」、帰国するに際しては、「軍に対する五井物産の威勢のほどを見せつける」ために利用したりもする。バンコクに赴いてももっぱらタイ在住の日本人菱川、五井物産の支店長などに囲まれて隔離され、菱川という案内人を立てタイ人とは直接交渉を持たずにすませている。プーアスティンが「よく準備された旅行では、観光客は目的地に着いてもそこに住んでいる人と交渉する必要はまったくない」³²⁾と指摘した通りの観光客である。

五井物産は三井物産をモデルとしていると考えられるが、五井物産という商社の影は『豊饒の海』のそこかしこに姿を現す。例えば『春の雪』において、清顕と聡子の違い引きのための自動車を運転手付きで貸すのは「豪商の息子」である「五井家の次男」であり、『奔馬』で勲たちが暗殺候補として挙げた財閥の大物の五井重五郎については、「金は持つてゐるが小者」として即座に却下される。このように物産をめぐる細かなエピソードの書き込みが点綴している。『豊饒の海』全体の構造において、唯識論や転生という物語を駆動させる大きな枠組が提示される一方で、大財閥の影は折々の場面に登場し、転生への契機を示唆する歯車として物語の結節点となる役割を果たしている。五井物産は日本近代史を時系列的に貫く『豊饒の海』の中で、唯識論と共に、物語を駆動させるもう一つの要素である日本資本主義の象徴として、清顕や勲の背後に姿を見せる。『暁の寺』後半部から、『天人五衰』に到るまで、『豊饒の海』物語全体において、高度に資本主義化された〈日本〉というイメージとして表象されている。またジャントラパー姫は「肉の厚いシャム薔薇」として、女性ジェンダー化されたタイのイメージ表象を体現した存在であるが、本多は彼女に託して、タイを異性愛のまなざしのもとに女性ジェンダーとして固定化し、審美的対象として見ている。

しかしテキスト空間における関係性は、西欧がアジアを見るような一方的で直接的なまなざしのように単線的ではなく、より複雑な様相を呈している。本多がタイを見るとき、彼に象徴される近代日本が、〈南洋〉に出会ったときの、その出会いのかたちが描出されている。例えば本多は五井物産支店長との会食の折、「南方外地の日本人の紳士連」の「人もなげな一団の素振」を「発見」する自意識を持っている。

何故だらう。本多はこの瞬間、はじめて彼らの醜さを、自分自身の醜さと共に、如実に発見した、と云ふほうが当つてゐる。これがあの美しかつた清顕や勲と同じ日本人とはとても思はれない。（『暁の寺』第1部10）

海外に出て日本人としてのアイデンティティを再認識するというのはありふれた構図であるにしても、本多のまなざしは複雑に交錯していく。例えばインド旅行の途上で本多自身が、「ただ一人の東洋人の客に対する、押し黙つたイギリス人たちの無言の敵意」のこもったまなざしの前に曝されたとき、差別と被差別の構図は逆転する。自分と同類の日本人がアジアの国において「人もなげ」に振る舞う「醜さ」に批判と嫌悪のこもった目を向ける一方、「五井物産の手配でホテルには極上の部屋が用意され、車も亦最上の車が本多を待つてゐたので、シーク族の運転手の恭しい態度にいたるまで、ほかのイギリス人の観光客の反感をそそる種子」になるこ

とを痛感している。西欧からは被差別のまなざしに曝され、アジアからは専ら金の力で表面的な優越性を獲得しているという構図の中に、彼は同胞の「醜さ」、いわば鏡に映った自分自身の姿を見出していると言えよう。

タイに滞在中は他者のまなざしには鈍感であった本多が、一転して見られる側に立つという主体間の力学に曝される。本多はインド旅行における自己の優越的立場が、「前以て五井物産から渡つてゐる多額の心付」という経済的な担保によるものであることを自覚している。アジャント石窟寺院において転生の実在を確信するに至る本多であるが、超歴史的な世界観への覚醒が描かれる一方で、このような現実の権力関係の交錯に敏感に反応する姿がテキストに書きこまれていることは看過できない。彼は自分に向けられたイギリス人の「権高な退役軍人らしい美髭の老人」の敵意に満ちた視線に射すくめられてしまう。西欧の前では差別的な視線に曝されながら屈服し為す術もない、本多の屈折した認識が露呈している。そこには西欧－アジア－日本をめぐる輻輳した関係性が見出せるが、めまぐるしく変転する視線の力学に対抗するかのよう、第二部において、本多は成長したジン・ジャンに再会して「花卉の肉の厚いシャム薔薇を神祕化する作業」に熱中する。同時に西欧の側のまなざしを超越する装置として、ジン・ジャンをめぐる転生の実体化へのめり込んでいく。

5. 〈タイ〉表象の女性ジェンダー化

日本における近代意識が文明化・欧米化することによって実現し、その過程で他のアジア太平洋民族や国家を非文明的なものとして未開視することと深く結びついていた。それは移植された西欧文明に対する日本人自身のコンプレックスの裏返しであるが、ヨーロッパがアジアを女性視し、周縁化してきたように、日本もまたタイを女性ジェンダー化してとらえていた経緯については先に述べた通りである。キャロル・グラックは、日本－アジア－欧米の三者をめぐるまなざしの交錯について次のように指摘している³³⁾。

日本人の例外主義は、自らを一つではなく二つの鏡に映し出すものであった。すなわち、アジアが過去であり、「欧米」が未来だった。そして日本の歴史は、その両方と関わりながらも、そのどちらとも違ったものとして想像されたのだ。

他者の姿を見るとき、そこには自分自身の姿が映し出されているとすれば、〈日本〉を描くときにも、他者という鏡に映った自分の姿なしに描くことは出来ない。西欧－タイという単線的な関係性ではなく、日本はイメージを仮託される客体であり、同時にアジアを女性としてまなざすことで主体構築するという屈折した回路が構築された。それは国民的アイデンティティを構築する上での必要なプロセスでもあった。

いずれにしても、このように他者を表象イメージの中に取り込み、イメージに排除と包摂の機能を持たせることは、戦前においては帝国主義的欲望として、戦後は経済的覇権主義として、その目的や契機は異なるもののイメージ化のプロセス自体は継承されていったと言える。これは敗戦時期をはさんでの〈南洋〉と〈東南アジア〉の差異と共通性を測定する上でも看過でき

ない問題をはらんでいる。今まで述べてきたように、ジェンダーカテゴリーと国家のイメージ表象の結合は、戦前期のみに見られる一時的現象ではなかった。明治期末から昭和10年代に到るまで、さまざまなテキストの中に立ち現れるタイの姿は、イメージであると同時に地勢学的実体でもあり、そこには当時の世界情勢をめぐる歴史的な文脈が見出せる。そこに湧出した〈南洋幻想〉は、現実の政治的・社会制度と往還しつつ構築されていった。

土屋忍は「『日本』という場所から発せられたイメージの集合体もまたリアルな南洋である」と述べ、さらに「過剰な意味とローカルなイメージをとまなう言語としての場所（トポス）であった。」³⁴⁾と位置付けている。相手と出会うことなく、未知の領域として日本国内において紡がれた一方的かつ奔放なイメージには、他者性が欠落した言語として構築された場所であったと言える。実際には明治期以来、タイに渡った日本人は統計的には少ないが存在した。しかし「日本人養蚕技師の団」に雇用され、帰国することなく亡くなった「現地採用」の日本人職員、「からゆきさん」などの自ら発する言葉を持たない人々の声は国内には届かなかった³⁵⁾。

日本国内において、タイを含めた〈南洋〉の他者を露骨な経済的収奪の対象として扱うだけでなく、他者の個別性に鈍感なまま審美的対象として見つめることは、他者を包括していく国民国家が制度化した言説の過程のひとつと言える。しかし他者を美学的に実体化しようとする欲望は、それ自体が破綻する以前に、夢見る主体の側が敗戦したことでいったん頓挫した。しかしその欲望は意匠を変え、日本が経済進出を企てた1960年代に至って復活していった。土屋は明治以後の日本人が生成した「南洋」とは、「容易に翻訳不可能な固有の場所であり、『日本近代文学』と関わる問題の所在でもある」³⁶⁾と述べている。戦後の文学において、戦前のタイをめぐる言説が時代的変容を被りながらも復活を遂げたことの意味を、その構築のプロセスをたどりつつ再考する必要がある。

一方で近年は日本のアニメ、漫画、あるいは制服ファッションなど、さまざまなサブカルチャーをタイの若者が受容し、消費するという事態が見られるようになった。日本側が一方的にタイをエロ的な魅惑をたたえた南国・楽園として見つめ、消費する側になるだけではなく、同じように文化の諸相において見返される存在であるという、当たり前事態に気付くことになった。平松秀樹の報告³⁷⁾によれば、日本の特撮映画『ウルトラマン』『仮面ライダー』を換骨奪胎し、『ラーマキエン』に登場する猿神の英雄ハヌマーンと戦うタイ文化のコンテクストに置き換えた作品が登場している。いわば日本におけるイメージが脱構築され再生されて新たな作品が登場している。今後の日本文化研究において、1960年代以降の日本文学におけるタイの表象表現を考える上で、戦前の形成された〈南洋幻想〉との差異と共通性を精査することで、二つの時代で紡がれたイメージの距離を測る必要がある。相互の関係性の中で言語遂行的に表されたイメージは、他者との出会いを通じて、常に刷新し、書き換えられていく。そこにまだ見ぬ相手の姿、そして自分自身の姿を見出すことができるだろう。

タイ国は1939年にSiamからThailandに国名を改称した。本稿では現在の国名「タイ」で一したが、引用文においては「シャム」「暹羅」という呼称および表記を使用し、他の国についても当時の国名を表記の通りそのまま用いた。また本文中に引用した資料について、旧字体は新字体に改めた。

注

- 1) 志賀重昂『南洋時事』（丸善商社書店, 1887・4）
- 2) 澤田謙『大南洋』（豊文書院, 1940・7）。〈南洋〉地域の定義は時代により変遷しているが、その歴史的推移については、『『南方共栄圏』－戦時日本の東南アジア経済支配－』（疋田康行編, 多賀出版, 1995・2）の「第1章 『南方共栄圏』研究の課題と日本の戦時経済支配の特徴」において詳述されている。
- 3) 神谷忠孝『『南洋』神話の形成』（矢野暢他編『講座東南アジア学 第10巻 東南アジアと日本』所収, 弘文堂, 1991・2）
- 4) 三島由紀夫「無題（日本人物探検・三島由紀夫）」（『小説新潮』1968・1）
- 5) 『作家のアジア体験－近代日本文学の陰画－』（芦屋信和・上田博・木村一信編, 世界思想社, 1992・7）, 『南方徴用作家－戦争と文学－』（神谷忠孝・木村一信編, 世界思想社, 1996・3）などがある。
- 6) 吉川利治「2 近現代史のなかの日本と東南アジア」（吉川利治編『近現代史のなかの日本と東南アジア』所収, 東京書籍, 1992・10）
- 7) 神谷忠孝「方法としての東南アジア・序説」（『蔡』第1号, 1984・7）
- 8) 安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」（『法政大学文学部紀要』第22号, 1977・3）によれば, 稲垣満次郎は1893（明治26）年以來, 副島種臣の主宰する東邦協会（明治24年創立）の幹事長を務めた。東邦協会は「東洋諸国及び南洋諸島に関する講究」を事業目的として設立された。
- 9) 岩本千綱『暹羅老搞安南三国探検実記』（博文館, 1897・9）。岩本は1983年, 1984年, 1986年に暹羅（シヤム）, 老搞（ラオス）, 安南（ベトナム）を旅行し, その時期は日清戦争（1894～95）前後の時期に重なっている。その体験を記した本書は, 1943年に再評価され, 改編再版された。
- 10) 山口武『暹羅』（外交時報社, 1921・8）
- 11) 佐藤春夫「山田長政の一生 閩南の鵬」（『週刊少国民』1942・5・17～8・9）は、『山田長政』（名作歴史文学）として聖紀書房から1943年10月刊行。
- 12) 土屋了子「山田長政のイメージと日タイ関係」（『アジア太平洋討究』5, 2003・3）において, 山田長政関係の資料について通時的に収集し, 各時代の同時代言説について, 文学テキスト, 教科書の記述も含めて分析している。
- 13) 井東憲『南洋の民族と文化』（大東出版社, 1941・10）
- 14) 松下正寿「大東亜建設の基本精神」（大東亜戦争調査会編『大東亜の建設』所収, 毎日新聞社, 1944・10）
- 15) 岡野繁蔵『南洋の生活記録』（錦城出版社, 1942・7）
- 16) 『タイ国概観』（日本タイ協会編, 功文社印刷所, 1940・12）
- 17) 矢野暢「近代日本における南進の論理」（『東南アジア世界の論理』所収, 中公叢書, 1980・3）
- 18) 吉川利治「第四章 タイ」（『近現代史のなかの日本と東南アジア』所収）。また河部利夫の「タイ現代政治の権力構造と動態」（山本達郎編『東南アジアにおける権力構造の史的考察』所収, 竹内書店, 1969・3）にも明治維新とチャクリ改革に共通項を見出す言説についての分析がある。
- 19) 後藤乾一「近代日本と東南アジア－南進の「衝撃」と「遺産」」（岩波書店, 1995・1）
- 20) ベンジャミン・バトソン「タイのナショナリズムと対日関係の展開」（『戦間期東南アジアの経済摩擦』所収, 杉山伸也・イアン・ブラウン編, 同文館, 1990・8）
- 21) 富沢寿男「第二章 王権観念の原理と諸相」（土屋健治編『講座東南アジア学 第六巻 東南アジアの思想』所収, 弘文堂, 1990・12）
- 22) 「再びクラ問題について（三月九日バンコック・タイムズ紙所載）」（『財団法人暹羅協会々報』第7号, 1937・5）
- 23) 坂本雅子『財閥と帝国主義－三井物産と中国－』（ミネルヴァ書房, 2003・7）

- 24) 23) に同じ
- 25) 村田翼夫「戦前における日・タイ間の人的交流」（『国立教育研究所紀要』第94集，1978・3）
- 26) 春日豊「戦争と財閥商社（上）－アジア太平洋戦争下の三井物産－」（『名古屋大学研究論集149，史学50』2004・3）
- 27) ナムティップ・メータセート「日本に描かれた『タイ』－オリエンタルなロマンスを求めて－」（『国際日本文学研究会集會會議録』2007）
- 28) 吉川利治「序章 1 近現代史のなかの東南アジア」（吉川利治編『近現代史のなかの日本と東南アジア』所収，東京書籍，1992・10）
- 29) 石井米雄「エピソード」（『日・タイ交流六〇〇年史』所収，石井米雄・吉川利治編，講談社，1987・8）
- 30) 『東南アジア諸国よりみたる対日貿易の問題点』（功力喜久男編，亜細亜経済研究所，1970・12）
- 31) 砂本文彦『近代日本の国際リゾート 一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』（青弓社，2008・10）
- 32) ダニエル・J・ブーアスティン『幻影の時代－マスコミが製造する真実』（後藤和彦・星野郁美共訳，東京創元社，1964・10）
- 33) キャロル・グラック『歴史で考える』（梅崎透訳，2007・3，岩波書店）
- 34) 土屋忍「大正期『南洋』論の展開－鶴見祐輔と芥川龍之介」（『社会文学』第19号，2003・9）
- 35) 吉川利治「暹羅国養蚕顧問技師－明治期の東南アジア技術援助－」（『東南アジア研究』18巻3号，1980・12）において，明治末期に日本人養蚕技師の一団がタイ国に顧問として雇われ養蚕局の職員の中には現地バンコクで雇われた日本人もいたが，給料は日本から派遣された日本人の約半分であり，任地で死亡した例もあったことを報告している。また『暹羅王国』（石川安次郎，経済雑誌社，1897・9）には，「日本の醜業婦は，明治十七八年頃より早くも盤谷府に侵入して，日本人の代表者たりし」というからゆきさんについての記述がある。
- 36) 34) に同じ
- 37) 平松秀樹「タイの日本文学・日本研究」（『国際ワークショップ 東南アジアとの通路－日本文学・文化研究理論を考える』，2009年3月14日，立命館大学）